始

大学書林文庫

Nr. 201

九州醫專
教授 藤部幸一 著

醫學獨文の構造

東京・大学書林・牛込

礒部幸一著　**醫學生のラテン**　定價一、五〇　送料〇、〇三

松岡明著　**獨逸醫文の讀み方**　定價二、〇〇　送料一、一二

礒部幸一著　**獨逸醫文の書き方**　定價一、五〇　送料〇、〇九

特252
557

DAIGAKUSYORIN-BÜCHEREI

K. ISOBE

Die deutsche Satzbildung für Mediziner

Nr. 201

VERLAG VON DAIGAKUSYORIN

序

文學もののやうな抒情文と異つて、醫文は叙事文であるから、構文は割合に簡明である。それだけにある程度まで構文定式を覺え込めば、後は論理的に頭を働かせればよい。形容澤山の、所謂美辭麗句がないから、いやに den Kopf zerbrechen することはない。構文定式を的確に kennen lernen して、これを基本にして醫文を讀んで行くなら、初學者諸君には相當の自信がつくだらうと思ふ。勿論ここに擧げた定式構文例數は僅少ではあるけれども重要點に觸れてゐるものばかりであるから、是非諳記する位ゐに讀んで戴きたい。

昭和十二年冬

著　者

目　次

獨文構造の要領…… 7

第一章　定動詞が ist か hat なら……11

1.　ist や hat が時の助動詞の場合(11)—II. ist が連辭の場合(一)(11)—III. ist が連辭の場合(二)(12)

第二章　定動詞が動詞なら……13

1.　分離動詞(13)—II. 熟語動詞(13)—III. 二聯動詞(15)—IV. 添加を伴ふ動詞(15)—V. zu を伴ふ不定法と連結する動詞及び形容詞(15)

第三章　格支配と前置詞……17

1.　二格支配の動詞と形容詞(17)—II. 三格支配の動詞と形容詞(18)—III. 四格支配の動詞と形容詞(18)—IV. 四格と二格支配の動詞(18)—V. 四格と三格支配の動詞(19)—VI. 四格と四格支配の動詞(19)—VII. 前置詞支配の動詞と形容詞(19)— VIII. als と結ぶ動詞(19)

第四章　定動詞が kann や wird なら……21

1.　定動詞が話法の助動詞の場合(21)— II.wird が未來の助動詞の場合(21)—III. wird が受動の助動詞の場合(22)

第五章　名詞を修飾限定するもの……24

1.　形容詞と分詞(24)—II. 數詞副詞及びzuを伴ふ不定法等(24)—III. 名詞(25)—IV. 修飾限定の多い文(26)

第六章　對應接續詞……28

第七章　長文を解剖する……30

1.　關係及び疑問代名詞(30)—II. 關係及び疑問副詞(31)—III.從屬的接續詞(32)—IV. Komma の多い長文(38)

第八章 es を含む文の種々相……38
1. 文法上の主語(38)—II. 先行詞としての es (39)—III. es と關係代名詞(40)— IV. es と前置詞の融合形(40)
第九章 省略と短縮……43
I. 省略(43)—II. 短縮(44)

獨文構造の要領

1. 獨文を解釋するに當つては、何と云つても**構文**を見極めなくてはならぬ。その第一着眼點は**定動詞**だ。定動詞と云ふのは主語に應じて文法變化してある動詞、助動詞のことだ。定動詞が ist とか hat とか war とか hatte とかであれば、これは不定法 sein 又は haben の變化したものであることは云ふまでもない。例へば ist が見つかれば、これと結ぶものを文尾に求める。ist が助動詞なら、動詞の過去分詞（能働及び受働の）がある筈だ、又この ist が A は B なりの文體をなす連辭となつてをれば、必らず文尾に形容詞（又は形容詞的のもの）があるか又は一格名詞（又はその代りをなすもの）が存在してをる。斯くて一つの纏つた文が構成されてゐる譯だ。
2. 定動詞が連辭以外の**動詞**の場合にも文尾にこれと結ぶものを求める、例へば分離動詞なら、必らず文尾に前綴がある筈、又熟語動詞なら、前置詞を伴ふ名詞とかその融合形で小文字になつてゐるものとか又二聯動詞なら不定法動詞があり又**ある動詞**は**第二述語としての添加**（形容詞、zuなき不定法分詞又は als を伴ふ名詞）を文尾に有つてゐるとか、種々のものが文尾に控へてゐるものだから、必らず文尾まで注意を向けるこ

とが肝要だ。

3. 定動詞が文尾のものと結んで完全に述語としての機能を發揮してをることを看取した後で、今度はその動詞の種類を識つて**目的語**を求める。目的語は二格、三格、四格の名詞又は代名詞である、中には前置詞を伴ふ名詞もあるから動詞との有機的關係に注目する、目的語を採るのは動詞だけでなく、形容詞、**分詞**の内にも相當あることを知らねばならぬ。

4. 定動詞が**話法の助動詞**のときは、文尾には必らずzuを伴はぬ不定法（現在及び過去の不定法）がある。**未來の助動詞**のときも亦同じくzuを伴はぬ不定法（現在及び過去不定法）がある。定動詞としての動詞が不定法と結ぶ場合はその不定法は原則としてzuを伴ふ不定法である。(第二課 E を見よ。)

5. 名詞と結んで、これを修飾限定する品詞の代表は**形容詞**である。しかし他の品詞とても例へば分詞、數詞zuを伴ふ不定法、副詞、名詞等も亦形容詞的に用ひられ、所謂**附加語**（Attribut）として名詞を限定する。冠詞と名詞との間に來るのは形容詞、分詞、數詞等で、zuを伴ふ不定法、副詞、名詞（二格、前置詞を介して、同格）は被限定名詞の後に來るのが普通だ。しかし二格の名詞、代名詞が前に來るときは被限定の名詞は冠詞を省く。冠詞と名詞との間には幾つもの形容詞や分詞が來るばかりでなく、その分詞形容詞を規定する副

詞や副詞句又は分詞や形容詞が支配する目的語も亦その分詞形容詞の前に置かれるので、非常に長い形態の**名詞句**が出來上る。この場合、この複雜なる名詞句を完全に看取する目標は冠詞及びいくつあつても分詞、形容詞の語尾變化の同形なる點である。

6. 文と文を結ぶ接續詞 und, aber 等は大して問題ではないが、中には二個以上の語から成り立つて、それが互に對句をなしたり又は前後兩文に夫々一つづつ存在して互に相呼應する所謂**對應接續詞**なるものがある、これを早く見付けることは構文を知る捷徑だ。

7. **複雜なる文章**卽ち Komma が澤山あつたり、關係代名詞、接續詞或は關係、疑問副詞の介在する文章では Komma と Komma との間のものを枝脈と見做してつまり括弧して置いて先きに進み、文の本脈を攝むことだ、その要領は定動詞から始めることだ。Komma が一つなればそこを區切りとして前文又は後文になつてゐる主文の構成を攝み、次にその他へ進む、それには先づ**結合詞**（關係代名詞、接續詞等）を見出し且つその文尾にある定動詞を見極めて徐ろに解釋にかかる。その要領は主文の場合と同じだ。

8. es が主語になつてゐる所謂非人稱的文章形態も獨文の中で可成頻繁に出て來る文型で甚だ重要なるものの一つである、例の非人稱動詞の場合は云ふまでもなく、人稱動詞が非人稱的に用ひられたり、他に前置詞

なぞと組んで一文體をなしたり又 es が接續文、關係文、不定法文の先行詞の役目を演じたり、仲々 es も馬鹿にならぬから、主語としての es を見とめることが第一で、次には動詞の機能を考へ、目的語やその他の支配關係に注意することは定動詞本位に解釋を始める場合と同じだ。

9. **定動詞が文頭に在るが**文尾の方には Fragezeichen ? がない、併し後の方に Komma があり、その後に so 又は dann 等があつてその次が定動詞と云ふ場合は so の前の文は接續詞 wenn 等が省略されるるので、それを補つて譯す、又 als と云ふ接續詞の次にいきなり定動詞（接續法の動詞）があつた場合にも亦 ob 等の接續詞があるものとして譯す、又**屬文を短縮して** zu を伴ふ不定法文にしたり、或は**分詞、形容詞が**實は屬文の短縮されたものであつたりする故、この特種なる zu を伴ふ不定法とか分詞とか形容詞とかを特に注意して早くこの種のものを見屆ける習慣をつけなくてはならぬ。

第一章　定動詞が ist か hat なら

I. ist や hat が**時の助動詞**の場合

1. Der Arzt ist gestern nach Deutschland abgereist.（現完）醫者は昨日ドイツへ出立した。
2. Das kranke Kind hat heute Morgen heftig geweint.（現完）病氣の子供は今朝ひどく泣いた。
3. Auch das Gehör ist früh zur Diagnose herangezogen worden.（受身現完）
   聽覺も亦早くから診斷に利用されたものだ。

II. ist が**連辭**の場合(一)

1. Das Abdomen ist in letzter Zeit äußerst **empfindlich**.（形容詞）腹部が最近甚だしく敏感だ。
2. Der Stuhlgang ist meist **stopfend**.（現分）便通は秘結してをる。
   Der Patient ist **abgeschlagen**.（過分）患者は脱力してをる。
3. Dann ist der Tod durch Verblutung **zu befürchten**.（zu を伴ふ不定法）その場合には失血に依る死が恐れられるべきである。
4. Diese geistige Aktivität ist vorwiegend aufnehmender **Art**.（二格名詞）この精神能力は主として受容的である。

5. Der Harn ist **ohne Sediment**. (前置詞を伴ふ名詞) 尿には沈澱物がない。

III. ist が**連辭**の場合(二)

1. Die Pest ist **eine** sehr gefährliche **Infektionskrankheit**. (一格名詞) ペストは甚だ危險な傳染病である。
2. Der Gesamtverlauf der Arthritis deformans ist **ein** äußerst **chronischer**. (一格名詞省略) 畸形性關節炎の全體の經過は甚だ慢性的である。
3. Das Papillom ist **eine der** häufigsten Neubildungen im Kehlkopfe. (一格名詞の代りの數詞)乳嘴瘍は喉頭に最も多く出て來る腫瘍の一つである。

【解說】

1. ist, hat が助動詞の場合

ist が文尾の過去分詞と結んで現在完了をなす、併し過去分詞が形容詞化したものであれば ist は助動詞でなく連辭となり卽ちBの場合になる故、過去分詞の原形卽ち abreisen が sein と結んで現在完了をなす**自動詞**であることを確認せねばならぬ。ist と文尾のworden とを看取すればこれは受身であることは云ふまでもない。

hat と文尾の過去分詞ではこれは別に問題はない、現在完了文である。

2. ist と文尾の形容詞と結んで、主語の性質を表はす述語の役目をなす、最も普通の文である、併しこの場合の ist は主語の性質を表はす述語形容詞と主語とを結ぶ役目をなす故これを**連辭**と云ふ。連辭は ist 卽ち sein だけでなく werden も bleiben も矢張り連辭である。又この連辭と結ぶものは本來の形容詞だけでなく分詞でも形容詞化したものや名詞の本質を喪失して形容詞化した名詞の二格形及び前置詞と結んだ名詞、更に未來分詞 (zu を伴ふ現在分詞) が述語的に用られないために變形した「zu を伴ふ不定法」なぞのあることに注目せよ。殊に最後の…ist…zu＋不定法の形式は一種の**受動文**であつて、それに更に sollen や können の意味の加はつたものと知らなければならぬ。

3. 同じく連辭 ist と結ぶ一格名詞、これは主語の種類、種族を說明する文體である故、B の二格名詞なぞの場合とは全然內容を異にした文章である、これを混同して例へば彼は病氣だと云ふ文に Er ist eine Krankheit. と一格名詞を述語にしたら、實に怪文と云はねばなるまい。それはそれとして一格名詞の代りをなすものに數詞や冠詞附の形容詞だけで一格名詞を省略したものもあることも序に覺えられたい。

第二章　定動詞が動詞なら

I. 分離動詞

Das Erbrechen dauerte **an** und hörte auch am nächsten Tage nicht **auf**.

嘔吐は續き翌日も止まなかつた。

II. 熟語動詞

1. Für die klinische Medizin **kommt** fast ausschließlich die Nosologie **in Betracht**. 臨床醫

學には殆んど專ら疾病學が問題になる。

2. Nach kurzer Zeit **kam** eine vollkommene Heilung **zustande**. 暫くの後には完全な治癒を生じた。

3. Unter den Ursachen des primären Radikulitissyndroms **spielt** die Lues **eine Rolle**. 原發性脊髓神經炎徵候群の原因の內では黴毒が意義を持つてをる。

4. Die Studenten **sind** sich nicht über das Wesen der Medizin **im klaren**. 醫學生は醫學の本質に就てハッキリ知つてゐない。

5. Der Kranke **ist** nicht **imstande**, die Konsonanten m.n. und ng. ordentlich **auszusprechen**. 患者は m. n. ng. の子音を正しく發音することが出來ない。

6. Diphtherie gefährdet beim Kinde das Leben, aber beim Erwachsenen **ist** das keineswegs **der Fall**. ヂフテリーは子供では生命を危くするが成人ではそんな事はない。

7. Bei stärkeren Blutungen **ist** ein Verband **am Platze**. 出血の甚だしい時には繃帶が當を得てゐる。

〔注意〕 4—7 までの定動詞は ist, sind であることに留意せよ。熟語動詞のホンの一部を擧げたにすぎない。

III. 二聯動詞

Im Verlauf der therapeutischen Anwendung **lernte** man das Bild der Hypervitaminose mit den Zeichen einer Dystrophie und schweren Sklerose der inneren Organe **kennen**. 治療的應用の經過中に榮養障碍と高度の內臟硬化の徵候とによつてヴィタミン過剩症の病像が知られた。

IV. 添加を伴ふ動詞

1. Das Kind liegt **schwerkrank** darnieder. 小兒は重症で臥てゐる。

2. Er lebte früher **als Arzt** in unserem Dorf. 彼は以前私達の村で醫者をしてゐた。

3. Bei der Inspektion finde ich die Schleimhaut am Zäpfchen etwas **geschwollen**. 視診で私は懸壅垂に於ける粘膜が少し腫脹してあるのを見る。

4. Ich höre die Luft mit einem sehr breiten und tiefen Geräusch aus dem Ohre **strömen**. 空氣が甚だ廣くて深い雜音を伴つて耳から流れて出るのが聞える。

〔注意〕 添加とは主語 (1 及び 2) 又は目的語 (3 及び 4) に關係し第二述語の働きをするものである。

V. zu を伴ふ不定法と連結する動詞及び形容詞

1. Die Lungenkrankheiten **pflegen** indes meist erst in vorgeschrittenen Stadien zur Zyanose

zu führen. しかし肺病は多くは其の增進期に於て始めてチアノーゼを起すを常とす。

2. Die Tuberkulose **scheint** auch eine Rolle bei der Entstehung chronischer multipler Gelenkaffektionen **zu spielen.** 結核は又慢性多發性關節疾患の發生に際して重きをなすやうだ。

3. Schlaff gelahmte Glieder sind passiv **leicht zu bewegen.** 弛緩性に麻痺せる四肢は他動的に動かし易い。

【解說】

1. 元來獨逸文は文尾まで眼を通さねば完全に理解出來るものではない、何故なら獨逸文では文尾に重大要素が控へると云ふ傾向を持つてゐるからである。だから必ず文尾まで見てしかる後初めて辭書を引くことにしなければ嘘だ、定動詞だけ見て辭書を引いたら文尾の前綴が見落になつて意味はとれない。**分離動詞**の前綴が文尾に廻はることは最もよくこの間の消息を傳へてゐるものである。

2. 熟語動詞の形態は種々あるが例題の1では in Betracht, 2では zustande, 3では eine Rolle 4では im klaren, 5では imstande, 6では der Fall, 7では am Platze が恰度分離動詞なら前綴と同じやうに文尾にある點に注目せよ、獨文の特徵を遺憾なく發揮してゐる所が面白いではありませんか。

3. 二聯動詞は動詞と動詞が zu の介在なしに組み合つてゐてその一方が**定動詞**又は完了形にでもなれば**過去分詞**ともなるが他方は常に不定法のままで使はれるので、その變化する方の動詞の數には一定の制限がある、こんな二聯動詞

は一種の熟語動詞として記憶せよ。

4. 添加と共に使はれる動詞は無限だ。强ひて制限を求むれば sehen, hören, finden 及びこれと類似の意のある動詞がよく添加と共に使はれる。そして添加が不定法であるとCの二聯動詞に酷似してゐる、しかし用途は大變に違つてゐる、對比して下さい。さて添加は品詞としては形容詞(分詞)、als 附きの名詞又は不定法等であつて、主語又は目的語に關し第二の述語としての使命を持つてゐるものである。

5. 元來一つの動詞が他の動詞と結ぶ場合には通常一方は zu を伴ふ不定法の形式をとるが、變化する方の動詞で醫文中に頻繁に出て來るものはさう澤山はない。又この zu を伴ふ不定法が ist といふ連辭と結ぶ述語形容詞に關連する場合があるので此所に參考のために擧げて置いた。

第三章　格支配と前置詞

I. 二格支配の動詞と形容詞

1. Die hysterischen Anästhesien **bedürfen** häufig **keiner** besonderen **Behandlung.** ヒステリー性知覺消失は特別なる手當を要しないことが往々ある。

2. Bis vor 2 Jahren **erfreute** er **sich der** besten **Gesundheit.** 彼は二年前迄は極めて健康であつた。(再歸動詞)

3. Der Zustand des Kranken ist **des Kampfers bedürftig.** この患者の容態はカンフルが必要だ。

II. 三格支配の動詞と形容詞

1. Eine besondere diagnostische Bedeutung **kommt der** bloßen **Vermehrung** der Atemfrequenz in diesen Fällen nicht **zu.** 此の場合、呼吸數が單に增加することには診斷上特別の效用はない。
2. Der Kranke kann **sich dieser Beschäftigung** nur kurze Zeit **hingeben.** 患者はこの仕事にホンノ一寸の間しか集中することが出來ない。(再歸動詞)
3. Blut ist **dem Stuhl** beigemengt. 便には血が混じてをる。

III. 四格支配の動詞と形容詞

1. Der Stuhl **enthält Blut.** 便には血が混じつてをる。
2. Er **zog sich** vor ungefähr 20 Tagen **eine** starke **Erkältung zu.** 彼は約二十日前ひどひ風邪を引いた。(再歸動詞)
3. Als der Patient **10 Jahre alt** war, litt er an Keuchhusten. 患者が十歲の時百日咳に罹つた。

IV. 四格と二格支配の動詞

Er **klagte den Arzt** vor Gericht **eines Verbrechens** der Abtreibung **an.** 彼は墮胎罪の廉で醫師を告訴した。

V. 四格と三格支配の動詞

Der Kranke **legte** diesem Symptome **keine** große **Bedeutung bei.** 患者はこの症狀を重視しなかつた。

VI. 四格と四格支配の動詞

Prof. Gonda **lehrte mich** gerichtliche **Medizin.** 權田教授が私に法醫學を教へた。

VII. 前置詞支配の動詞と形容詞

1. Die Patientin **klagt über** Schmerzen auf der Brust. 女患者は胸部の疼痛を訴へてをる。
2. Die Rötung und Schwellung **beschränkt sich** oft **auf** das Gesicht bzw. die behaarte Kopfhaut. この紅潮と腫脹とは往々顏面及び有髮頭皮の上に限局する。
3. Die Rasselgeräusche **teilt** man **in** trockne und feuchte (Geräusche). 囉音を分つて乾性及び濕性(囉音)とする。(他動詞)
4. Die Farbe der Fäzes ist in erster Reihe **von** der Art der Nahrung **abhängig.** 糞便の色は第一に食物の種類に關係がある。

VIII. als と結ぶ動詞

Allgemein **sieht** man **als** Zeichen der Bösartigkeit von Geschwülsten infiltrierendes und destruierendes Wachstum **an.** 一般に浸潤性且つ

破壞性發育は腫瘍の惡性の徵候と看做される。

【解說】

大體、動詞又は形容詞には何格かの名詞又は代名詞を支配するものと、支配せずとも意味の完了するものと二種類ある。支配しない動詞及び形容詞は別に問題するまでもないが、格を支配するものはその格と有機的關係のあるものだから、これを結びつけてハツキリ覺え込むことが必要だ。その格にも種々あるが四格を支配するもの、たとへ更に外の格をも同時に支配してゐても、四格を支配するものは凡て他動詞と云ひ、他のものは自動詞、sich を伴ふものは再歸動詞と云ふことになつてゐる。

1. 二格支配の動詞はさう澤山はない、だんだん二格支配をやめて前置詞支配になる傾向があるやうだ、しかし現在ある少數のものは記憶する必要がある、同時に形容詞も覺えることだ。この動詞が現在分詞に變つて附加語に使はれる場合でも矢張二格を支配する。
2. 三格支配の動詞も亦過去分詞に變り、更に形容詞化するとも矢張三格を支配する。殊に例題 1. zukommen, 3. beimengen の如く前綴が元來三格支配の前置詞であると云つたやうな動詞は矢張三格支配する傾向を多分に持つてゐることに留意せよ。
3. 四格支配の動詞の內、再歸動詞は A, B 例題の中の再歸動詞の再歸代名詞が四格なるに反してこの C の例題の再歸代名詞は三格であることに注意せよ。又四格支配の形容詞は年齡、價値、度量等の意味をもつものに限る。
4. **E. F.** この三つは凡て他動詞の例であるが特徵たる四格の外に更に二格、三格或は別にも一つ四格と云ふ風に二個の格を支配することに注意せよ。
5. 動詞、形容詞は格支配の外に**前置詞**と有機關係を持つものだ。その前置詞は動詞、形容詞によつて種々あるから、兩者を結び附けて覺えるやうにすべきである。

6. 動詞の中には **als** と密接な關係を持つものがある、多く他動詞だが、再歸動詞の中にもある。そして als の次には**名詞**が來るが時としては**形容詞**も來る。

第四章　定動詞が kann や wird なら

I. 定動詞が話法の助動詞の場合

1. Das Eintritt des Todes **kann** plötzlich oder allmählich **erfolgen**. 死の起るのは突然であることあり或は徐々であることがある。(現在不定法)
2. Arzneimittel **können** äußerlich und innerlich **appliziert werden**. 藥劑は外用と內用とに用ひられる。(受働不定法)
3. Die Kranke **will** als Kind häufig an Rheumatismus **gelitten haben**. 患者は小供の時リューマチに度々罹つたことがあると云つてゐる。(過去不定法)
4. Er **soll** nach erfolgter Abfieberung noch 2 bis 4 Wochen wegen der Gefahr vor Nacherkrankung im Bett **gehalten worden sein**. 彼はスツカリ解熱した後でも尙ほ 2 乃至 4 週間は後發病の危險のために病床に置かれたさうだ。

II. wird が未來の助動詞の場合

1. Der Anfall **wird** bald **kommen.** 發作はやがて來るであらう。

2. In einigen Stunden **werden** rote Flecken sich über den ganzen Körper **verbreitet haben.** 數時間も經てば紅斑は全身に擴がつて（了つて）るるだらう。

III. wird が受働の助動詞の場合

1. Die Leiche **wird** heute hier von dem Anatomen **zergliedert.** この死體は今日ここで解剖學者によつて解剖せられる。（現在）

2. Harvey **wurde** 1578 in Folkestond **geboren.** ハーヴェー氏は 1578 年フォークストンで生れた。（過去）

3. Die Abschuppung **wird** durch ein bis zweimalige Waschungen, eventuell vorsichtige Abseifung **beschleunigt werden.** 落屑は一二回の洗滌、場合によつては愼重な石鹼使用によつて促進されるであらう。（未來）

4. Wenn ich morgen Sie im Krankenzimmer aufsuchen werde, **werden** Sie vom Oberarzt **behandelt worden sein.** 明日君を病室に訪ねる時には君は醫長の治療を受けて（了つて）るるだらう。（未來完了）

【解說】

1. 定動詞が話法の助動詞（können, müssen, mögen, dürfen, wollen, sollen, lassen）であると文尾には必らず不定法の動詞がある、但しこの不定法にも種々あつて、辭書に登錄された形卽ち**能働**の**現在不定法**（例題 1. の erfolgen）や同じく**過去不定法**（動詞過去分詞＋haben 又は sein）（例題 3. gelitten haben）や更に**受身**の**現在不定法**（過去分詞＋werden）（例題 2. appliziert werden）や同じく過去不定法（過去分詞＋worden sein）（例題 4. gehalten worden sein）等で、初め慣れる間は厄介なものだ、しかし不定法の各型式をハツキリ覺えたら案外整然としてゐて明朗だ。要するに話法の助動詞が出たら文尾に zu を伴はぬ不定法を求め、更にその不定法の種類によつて格や前置詞と結んでその有機的關係を考慮することだ。も一つ注意することがある、それは話法助動詞と結ぶものに（他動詞の過去分詞 ＋ sein）といふ形式のものがある、これは**受身の現在不定法の代り**とも見られるし、又受身の過去不定法の **worden** を省略したものとも見られるからよくよく注意されたい。

2. 定動詞が wird で文尾に同じく不定法があればこれは未來を現はす文で、現在不定法があれば未來又は第一未來、過去不定法があれば未來完了又は第二未來の文である。

3. ところが wird が定動詞で文尾を見ると過去分詞がある、するとこれは Passiv 現在の定式だ、若し wird が wurde と過去であれば Passiv の過去の定式である、こんなことは文典の常識であるから大して問題にはなるまい、しかし Passiv の未來、未來完了は注意せぬと初步の間は一寸うるさい、でも不定法の各型を呑み込んでゐれば問題ぢやない。

第五章　名詞を修飾限定するもの

I. 形容詞と分詞

1. Der **exanthematische** Typhus ist eine **akute gefährliche** Infektionskrankheit. 發疹チフスは危險な急性傳染病である。
2. Die Lyssa entsteht durch den Biß **an** Tollwut **leidender** Tiere. 狂犬病は狂犬病に罹つてをる動物の咬嚙によつて起る。
3. Die morgen früh in der Frauenklinik **zu operierende** Kranke ist die Frau eines Offiziers. 明朝婦人科クリーニックで手術を受けるあの患者はある將校の妻である。
4. Die durch die Salvarsaneinwirkung **verursachte** Zurückdrängung der Mundhöhlenflora wirkt in allen diesen Erkrankungen beruhigend auf den Ablauf der entzündlichen Erscheinungen ein. サルバルサン作用に依つて惹起された口腔菌株の擊退は凡て此等の疾患に於ては炎症狀の進行に鎭靜作用をなす。

II. 數詞、副詞及び zu を伴ふ不定法等

1. Mein **erster**, sonst **starker** Sohn erkrankte plötzlich mit Kopfschmerzen und Übelkeit. 私の平素は丈夫な長男が突然、頭痛と惡心が起つて罹

患した。
2. Die Krankenkasarne **dort** soll binnen kurzem weggeräumt werden. そこの病棟は近日中取り拂はれることとなつてゐる。
3. **Das alles** gab für Pasteur den Anstoß, **sich** mit dem Gärungsvorgang **zu beschäftigen**. 此等が凡てパストールには醱酵作用を研究する原動力となつた。

III. 名　詞

1. Zwei Stoffe der Außenwelt, **die Luft und die Nahrung** sind für den Menschen lebensnotwendig. 外界の二つの素材卽ち空氣と糧食とは人間にとつては生活上缺ぐ可らざるものである。(同格)
2. Alle Lebewesen sind Kinder **der Sonne**. 凡ゆる生物は太陽の子である。(二格)
3. Wiederholte Erkrankung **an Varizellen** ist außerordentlich selten. 幾度も水痘に罹ることは甚だ稀れである。
4. **Als Ideal** schwebte Pastuer die Therapia sterilisans magna vor. 理想としては大量殺菌療法がパストールの念頭に浮んだ。
5. Sein Vater und **dessen** Untergebener sind wegen großer Brandwunden eben jetzt ins

Kranken aufgenommen worden. 彼の父とその部下は大火傷のためたつた今病院に收容された。

IV. 修飾限定詞の多い文

1. Die unumgänglich notwendige Vorbedingung einer planmäßigen Behandlung des erkrankten Menschen ist die Erkenntnis der vorliegenden Krankheit. 患者の組織的療法に必要缺ぐ可らざる豫定條件は目下の疾病を認識することである。

2. Der akute Gelenkrheumatismus ist eine häufig vorkommende, durch schmerzhafte Entzündung und Schwellung mehrerer Gelenke sowie fieberhaften Verlauf charakterisierte, nicht übertragbare Krankheit. 急性關節炎は多くの關節の疼痛性炎症と腫脹竝びに熱性の經過特徴として頻々と現出する非傳染性の疾患である。

【解說】

元來名詞を修飾限定する品詞は形容詞となつてゐる。だから形容詞は勿論形容詞的のものは皆名詞を修飾限定することが出來る、ところでその形容詞的のものは可成澤山ある、しかしその名詞との位置に關しては名詞の前に來るものと後に來るものとがある。

1. 先づ形容詞だが、一個の名詞に幾つもの形容詞が關係する時はその名詞の前に、皆同じ語尾變化をなして來る、又この形容詞が支配する前置詞や名詞或はこの形容詞を規定する副詞句はこの形容詞の前に置かれる、例へば Herr B.

holte mich eines Abends eiligst zu seinem $1^1/_2$ Jahre alten Knaben (B 氏は或る晩至急私を彼の一歳半になる少年の處に迎へた。) の文の中の alt はその前の $1^1/_2$ Jahre (四格) を支配してゐる、或は Das beim Lungenödem am meisten befindliche Symptom ist die Dyspnoe. (肺水腫の際、最も多く存在する症狀は呼吸困難である)の文中の befindlich は das 以下の副詞句、副詞に規定されてゐる。

分詞も形容詞的なものの一つで全然形容詞の特徴を備へ、その用法に於ても變りがない、ただ **zu を伴ふ未來分詞は受身**であることを忘れないやうにすることだ。

2. その他數詞、副詞及び zu を伴ふ不定法、是等は皆形容詞的のものである、その内の副詞は元來名詞を直接修飾すべき筈のものではないが、例題の Die Krankenkaserne dort は實は die K., die dort liegt, ……と關係文の中に含まれてゐた副詞を殘し、他を一切省略して出來たものである、隨つて副詞はその關係する名詞の後に置かれるのである。**zu を伴ふ不定法**も同樣關係する名詞の後に置かれるが、若しその不定法が目的語や副詞なぞを必要とする時は關係する名詞の次に Komma をうち、次に目的語や副詞を配置し最後に zu を伴ふ不定法と云ふ順序になる、つまり Komma 以下はその不定法の支配範圍と云ふことになる。

3. 名詞も亦一種の修飾限定語となる、その時には種々の形態をとる、先づ所謂同格 (Apposition) となつて關係する名詞の後に來り格を同じうするもの、又は**二格の形**をとりて同じく關係する名詞の後に置く、但し關係する名詞の前に置くこともある、その時は關係する名詞の冠詞は省くことに注意せよ、このことは二格の關係代名詞や指示代名詞の後に來る名詞も同樣で冠詞を省く。或は**前置詞附の名詞**

も關係する名詞の後に來る。最後に als を伴ふ名詞も一種の修飾限定語になるがこれは關係する名詞の前後いづれにも置く。

第六章　對應接續詞

1. Der Blutdruck steigt bei kleinen Digitalisgaben in der Regel **nicht, wohl aber** bei großen Gaben.　血壓はヂギタリスの小量投與の際は上昇しないけれども大量の際は上昇する。

2. Unter Digitalis schwinden dann **zwar** die manifesten Dekompensationserscheinungen, das Asthma cardiale **aber** kann wieder in den Vordergrund treten.　ヂギタリスによつて成程現在失調症狀は消失するにはするが併しまた心臟性喘息が主となつてくる。

3. Der Ausbruch der Scharlacherkrankung wurde **entweder** durch den Eintritt der Menses beschleunigt, **oder** die Scharlacherkrankung führte umgekehrt zu vorzeitigem Auftreten der Periode.　或は猖紅熱罹患の發生が月經の潮來に依つて促進されたか或は反對に猖紅熱罹患者が月經を早く潮來せしめたかである。

4. Shock bezieht sich **nicht** auf einen pathologisch-anatomischen Prozeß **als vielmehr** auf das

ätiologische Moment.　ショックは病理學的解剖學的機轉にではなく寧ろ原因的事項に關するものだ。

5. **Teils** schließt sich die Erkrankung an Schädelbasisfakturen, **teils** an luetische Meningitiden.　此の疾患は或は頭蓋底骨折に、或は黴毒性腦膜炎に繼續して起る。

6. Diese Methode findet **sowohl** aus therapeutischen **als auch** aus diagnostischen Erwägungen Anwendung.　此の方法は治療上並びに診斷上の考慮から應用される。

7. Für die Praxis spielt die Azetonurie eine **größere** Rolle **als** vielleicht bekannt ist.　實際上はアツエトン尿は恐らく既に知られてゐるよりも重大な意義がある。

〔注意〕　これは比較文で主文の中の形容詞の比較語尾 er と als との對應である。als 文は屬文故定動詞が最後にある。

8. Im übrigen ist die Prognose **um so** besser, **je** eher das Heilserum injiziert wird.　兎に角血療血清を早く注射すればするほど豫後は益々佳良である。

〔注意〕　この對應接續詞の後者 je の文は屬文故、定動詞が最後にある。

9. Die Pathologie zerfällt demnach **einerseits**

in die Dysontologie **anderseits** in die Nosologie. 從つて病理學は一は發育不全學と他は疾病學とに分けられる。

10. In den einzelnen Fällen überwiegt **bald** das eine, **bald** das andere dieser Symptome. 一つ一つの場合を見るに時にはこの症狀の一つ、時には他のものの方が優勢となる。

【解說】

玆に揭げた對應接續詞と云ふ名稱は一般に通用されてはゐない、しかし實際の用法上から命名したのである。この接續詞は二つ以上の語の組合せによつて初めて意味をなすもので、相互に呼應する性質のものである。しかし種類も多く、用法から云つても全く趣を異にしたものであるからその邊をよく注意して戴きたい。

第七章　長文を解剖する

I. 關係及び疑問代名詞

1. Die Darmtuberkulose ist eine tuberkulöse Entzündung des Darmes, **welche** regelmäßig zur Geschwürsbildung führt. 瘍結核は腸の結核性炎症で、これは通常潰瘍を形成するに至る。
2. Die Ganglien sind sehr reich an Blutgefäßen, **deren** Kapillaren die einzelnen Zellen umspinnen. 神經節は甚だ血管に富み、その毛細管は各個の細胞を纏絡してゐる。

3. Der Charakter einer Hämaturie gibt häufig einen Hinwies, aus **welchem** Teile Harntraktes die Blutung stammt. 血尿の特徵は尿管のどの部から血液が出て來るかとの指示となることが多い。
4. **Wer** von einer ernsten körperlichen Krankheit befallen wird, zieht den Arzt zu Rate. 重症に冒される者は醫者にかかる。
5. **Was** uns als Ärzte unmittelbar angeht, ist die Physiologie des Menschen. 醫師として吾々に直接に關聯することは人間の生理學である。
6. Glücklicherweise scheint er nicht heiser zu sein, **was** ein gutes Zeichen ist. 幸にも彼は嗄聲はないらしい、これは良い徵候だ。

II. 關係及び疑問副詞

1. Erzählen Sie mir, **wie** und **wann** Ihre Krankheit begonnen hat! 貴方の病氣がどう云ふ風に又何時起つたかそれを話して下さい。
2. Die Impfung gegen Pocken kam im Beginn des 18. Jahrhunderts nach England, **wo** sie als Variolation bezeichnet wurde. 天然痘に對する接種法は 18 世紀の初めに英國に傳つたが、そこではこれを人痘接種法と名付けた。
3. Der Patient hat sich die rechte Hand bei der Arbeit gequetscht, **wobei** der Daumen beson-

ders betroffen war. 患者は仕事中右手を挫いたがその際特に拇指をひどくやられた。

〔注意〕 wobei は副詞的のものだが實は was (關代) と bei との融合形である。

III. 從屬的接續詞

1. Ich hatte heftige Kopfschmerzen und **solche** Hitze, **daß** ich fortwährend trinken mußte. 私はひどい頭痛と絶えず水を飲みつづけねばならぬほどの熱があつた。
2. Bei der Narkose ist die allgemeine Regel, **daß** kleine Dosen eine reizende und erst größere Dosen eine lähmende Wirkung haben. 麻醉の際には小量では刺戟作用を、大量にして初めて麻醉作用を起すのが一般の法則である。
3. Für einige Zeit, **nachdem** ich Sie konsultiert hatte, war es mir besser geworden. 先生に診療を求めてから、暫くの間は、身體の調子がよくなつてゐました。
4. Dabei schmerzt mich der Hals, **so oft** ich schlucke. 何か嚥下する度毎に喉が痛む。
5. **Da** Ihnen der Appetit fehlt, werden Sie mit wenigem zufrieden sein. 貴方は食慾がないから少量で足りるでせう。
6. Besser ist solches Wasser, welches eben

gekocht hat, **weil** durch etwa eine halbe Stunde langes Kochen die Bakterien zerstört werden. 沸騰したばかりの水が一層良い、約半時間の煮沸に依つて滅菌されるからだ。

7. **Wenn** aber Schmerz in der Umgebung der Wunde eintritt, **so** versäumen Sie nicht, sofort ärztlichen Rat zu holen. 然し痛みが外傷の周圍に起るならば、直ちに醫師の診療を求めることを怠つてはなりません。
8. Die Resorption des Eisens im Körper wird allseitig anerkannt, **wenn** sie natürlich **auch** nur sehr gering ist. 體内での鐵分の吸收は勿論極少量に過ぎないけれど、各方面で認められてゐる。
9. Der Ausschlag wird deutlicher und ausgebreiteter erscheinen, **obgleich** man übrigens auch Scharlach ohne Ausschlag trifft. この發疹は比較的ハッキリと且つ擴がつて出て來るであらう、因みに發疹のない猖紅熱もあるにはあるけれど。
10. Ich werde nächstens bei Ihnen wieder vorsprechen, um zu sehen, **ob** Sie alles befolgen. 近々また御宅に立寄ることにしませう、萬事よく守られてゐるか見るためにね。
11. Es dauert diese Erscheinung gewöhnlich nur einige Minuten und verschwindet **ebenso**

plötzlich, **wie** sie gekommen. 此の現象は通常只一二分しか續かないで、それが現はれたのと同じく突然消失する。

12. Die Haut des Masernkranken sieht aus, **als ob** sie mit roter Farbe bespritzt worden wäre. 麻疹患者の皮膚は恰も赤色の染料を撒布したかの如くに見える。

13. **Je weniger** funktionswichtig die befallene Hirnregion ist, **umso länger** ist die Latenz. 侵された腦領が機能上重要でなければないほど、潜伏期は益々長い。

14. Das Fieber läßt allmählich nach, **indem** die Temperatur von Tag zu Tag niedriger werden. 體溫が日々低くなつて、熱は段々消退する。

IV. Komma の多い長文

Wenn wir uns nun die Frage vorlegen, durch welche Vorgänge in unserem Organismums alle diese Zyklen gesteuert werden, so fällt zunächst auf, daß alle diejenigen Faktoren einen deutlichen Rhythmus aufweisen, von denen wir wissen, daß sie einer zentralen Steuerung durch die vegetativen Zentren unterliegen.

此の文をざつと終りまで通讀する。さて文頭に從屬接續詞 wenn がある、これがある以上必らず so

か dann が後に出て來るものだ、果して三行目の終りに so fällt ..... aus とある、ausfallen が目に付く、目立つ意で目的語を要しない。fällt は三人稱單數現在、次に主語の名詞も代名詞もない、すると daß 文が主語になつてゐる、daß 文は定動詞 aufweisen まで、次には von denen に始まる關係文、これは wissen まで、次は又 daß 文で unterliegen に終つてゐる、構文が大體判つた。そこで注意すべきは第一 daß 文中の diejenigen は次行の關係代名詞と結んで相關代名詞の別名がある位密接であることと、他動詞 wissen の目的語が第二 daß 文であることだ、それで屬文が前文になつてゐるからこれから譯して行く。wenn から vorlegen までは（さて吾々が問題を提出するならば）となる。次は die Frage の內容を表はす疑問文だ（吾々の體內に於ける如何なる作用によつてこの凡ての周期は操縱されるか……と云ふ問題を…）となる。今度は主文だが主語が daß 文だからこれを譯す（あの總ての因子が著名な旋律を現はすことが……先づ目につく）。次は von denen 文だが wissen の目的語が次の daß 文だからこれを譯す（是等の因子は植物性中樞による中樞的操從を受けてゐる……ことを）von denen 文（是等の因子に就て吾々は知つてゐる）となる。結局この全文は大體次の如くなる（さ

て是等凡ての週期が吾々の體内の如何なる作用によつて操縦されるかと云ふ問題を提出するなら、先づ目につくことは、次に述べる因子全體が著名な旋律を現はすことだ、さてこの因子だがこれに就ては吾々はこの因子が植物性中樞の中樞的操縦を受けてゐることを知つてゐる。)

【解說】

長文を解剖する場合の目標は結合詞と Komma である。Komma が非常に多い文では Komma と Komma との間のものはその文の本脈に對する支脈であるから、これを先づ括孤に包んだつもりで後廻はしにしてその前後を連結して文の本脈を把握する、その場合の目標は前述の如く定動詞で、文尾のものと合せ考へる、然る後に Komma と Komma との間のものに移つて行く。結合詞(關係及び疑問代名詞、從屬接續詞、關係及び疑問副詞)のある文ではこの結合詞を先頭に載く所謂屬文(副文章とも云ふ)を後廻しにして主文の意味を先づ把握して、次に屬文に移る、屬文は主文の中の一文章成分を衍敷したものでその價値は主文中の一成分に過ぎないけれど、矢張文である以上、主語述語等の文章成分を具備してゐる、その意味の取り方は主文の場合と同じく定動詞から目をつけて行く、但し屬文では定動詞は文尾にあるを普通とする。

1. 關係及び疑問代名詞は文典で御承知の如きもので別に說明を要しないと思ふが關係名代詞の was には主文の中に中性形の名詞又は代名詞と關係することがあることを知るべきである。例へば Die Diagnose darf sich also niemals auf **das** beschränken, **was** krankhaft am Menschen ist. (診斷はそれ故に決して人間の病氣のある

所にのみ限定されてはならない、又 was は前文の一語でなく文意を受けることも周知の通りである。

2. 關係及び疑問副詞は別に問題ではないと思ふが、玆に worauf とか wobei とか woran とかこう云ふ形態のものがある、これは關代名詞の was や der, welcher と前置詞の auf, bei, an との融合形であつて、形の上では一個の副詞をなしてゐる、併し前置詞と融合した關係代名詞は主文の一語に代つたものや主文の意味を受けた was だつたものや種々ある故、前後の文の形態に注意して意味を取らねばならぬ。

3. 從屬的接續詞、之れは實に澤山あり、又同じ daß にしてもその用法に色々異つたものがあるから注意を要する、結局接續詞そのものに就て相當深い認識を持つて居なければならぬ。その内 **daß** 文が後方にある時、これの先行詞として **es** を主文に持つことがある、es が主語の時は問題はないが、この es が前置詞と融合して **darauf, darin** 等の形態をとることが多いから daß との關係を考慮することが必要だ。又 daß 文は主文の中の so, solch, derart 等と連結して程度、比較を表はし又主文中の名詞と結んで、その名詞の意味する内容を表はしたりする。Wenn 文は後にある主文の先頭に so や dann を置いて wenn に對應する、weil 文は前にある主文の中に deshalb を置いて相對應し、wenn auch, obgleich 等の認容文は主文の中の doch に應じ、wie 文は主文の so, ebenso に應ずる等、從屬接續詞は主文中に對應するものを持つことが多いからこれと關係づけて記憶することが大切だ、je..., je 又は je ..., umso 等は主文と屬文の文頭にそれぞれ一部分づつを据ゑる、しかも je や umso の次には比較級の副詞や形容詞がならぶ、そこで je..., je になると一體どちらが主文か屬文か見定めがつかないで初步者はまごつく、その

場合は定動詞を見ることだ、定動詞が文尾にある方が屬文だから、こんな何でもないことも油斷すると躓きになる。

第八章　es を含む文の種々相

I. 文法上の主語

1. **Es gibt** nicht zwei Menschen, die den gleichen Fingerabdruck haben. 同じ指紋を有する人間は二人と居ない。
2. **Es sind** die verschiedensten Krankheiten, die durch Erkältung ausgelöst werden. 風邪によつて惹起される色々な疾患がある。
3. **Es wird** Nacht, die Menschen schlafen, den Kranken flieht der Schlaf. 夜になる、人々は眠るが患者は眠れない。
4. **Es besteht** also zwischen Krankheitsursache, Entstehung und Verlauf kein einfaches Verhältnis. それ故に病原、發生及び經過の間の關係は簡單ではない。
5. Bei Pleuritis **kommt es** oft **zu** sekundärer Tuberkulose. 肋膜炎の場合には往々續發性結核を見るに至る。
6. **Es handelt sich** also in diesem Fall **um** ein subjektives Krankheitssymptom. だから此の場合は自覺的症狀が問題となる。

7. Aber nicht nur **auf** das Mikroskop, auch **auf** die Behandlung des zu untersuchenden Gegenstandes **kommt es an**. しかし肝要なのは顯微鏡だけではなく、檢査される對象の處置もさうである。
8. Ähnlich **ist es mit** den übrigen Vorschriften. 自餘の諸法則も同樣である。

II. 先行詞としての es

1. **Es** ist wahrscheinlich, **daß** diese Stoffe den Erreger direkt angreifen. 是等の物質が病原體を直接攻擊するのは本當らしい。
2. Wir sind nur zu geeignet, **es** als selbstverständlich zu betrachten, **daß** uns Leichen zu Studienzwecken bereitstehen. 死體は吾々の研究用に準備されてゐる、それを判り切つたこととして見る傾向がむしろありすぎるほどにある。
3. Ein großer Fortschritt war **es** schon, **als** man durch Anbringen eines Spiegels unter dem Objekt dieses Licht verstärkte. 對象物の下に一つの鏡を備付けてこの光を增强したのは確かに一大進步であつた。
4. **Wenn** ein gewisses Fettpolster ein bestimmtes Maß überschreitet, wird **es** zu einer störenden Belastung des Kreislaufes. ある種の脂肪層は一定量を超過するが、これは循環の障碍的負荷となる。

5. Nun war **es** auch klar, **warum** Wein und Bier verderben. 今や何故に酒やビールが腐敗するかと云ふことも亦明瞭になつた。

6. **Es** ist eine weitere Aufgabe der Atmung, diese Verbrennungsprodukte nach außen **zuschaffen**. この燃燒產出物を體外へ運び出すのは呼吸のもう一つの任務である。

7. Chrysipp erklärt **es** für verrückt, Gesundheit, Reichtum, Schmerzlosigkeit nicht **zu begehren**. クリジツプ氏は健康、富、無痛を願はぬ者があれば、それは氣狂ひだと聲明してをる。

8. **Es** ist nun ein Irrtum **zu glauben**, daß gewisse chemische Substanzen giftig seien, andere nicht. ある種の化學物質は有毒で、他のものは無毒だと信ずるのは間違ひだ。

III. es と關係代名詞

Es waren namentlich italienische Ärzte, **die** sich um die Mechanik der Atmung, der Muskelbewegung bemühten. 殊に呼吸や筋肉運動の機構研究に盡粹したのは伊太利の醫師達であつた。

IV. es と前置詞の融合形

1. Es liegt zweifellos ein tragisches Moment **darin, daß** Leben sich nur durch Tod erhalten läßt. 生命はただ死によつて維持されるに過ぎな

いといふ點には確かに悲劇的要素がある。

2. Jetzt handelt es sich **darum**, die Symptome kritisch **zu bewerten**, sie **zurückzuverfolgen** bis zu ihrer Wurzel, sie **zu erklären**. 今度は症狀を評價し、症狀を追及してその根幹にまで遡ぼり、これを說明することだ。

【解說】

Es の用法はその範圍が甚だ廣く、例へば前文中の一語（形容詞とか名詞とか）をもう一度繰返す代りに用ひ又一つの纏つた句の代りにも又一文の代りにもと云ふ風に甚だ用途の多いものである。それを纏めて一々ここに擧げることは大變だから、ここでは構文本位の建前からその內最も重要な用途のもの丈けを擧げるに止める。

1. 先づ主語になる es、**es gibt** と **es ist** (又は es sind) この二つの形式は共にものの存在を示す一種の文章形態で、**es gibt** の方は存在の主體となる名詞が常に四格であることに留意せよ、**es ist** の方は存在の主體になる名詞は常に一格であり又その名詞が複數の場合は es sind となる。**例題 3 es wird Nacht**...は非人稱動詞 es regnet 等に倣つた形式である。**例題 4. は所謂文の非人稱化**であつて es は全く文法上の主語で意味なく、眞の主語は一格名詞の Verhältnis である、この一格名詞を强調する爲め修辭上から形式的主語 es を文頭に置いたのである。**例題 5. es kommt ... zu ...** の形式は自然の成行、結果を示す一種の文型で、.....を見るに至る、.....となるの意味である。**例題 6. es handelt sich um ...** は um の次に四格の名詞が來て、それを中心に又はそれを廻つて...論ぜられる卽ち話題の中心は...だと云ふに外ならない、だから...**が問題**

となるとか**それは**…**だ**と譯せられる。又 um の次に名詞の代りに屬文が來る場合は例へば …darum, daß… の形式を採ることを知らねばならぬ。 **例題** 7. **es kommt auf (四格)**… **an** は auf の次に四格の名詞が來て、**それに**…**歸着する、それが問題になる、それが肝要だ**と譯される。後に屬文の來る場合は …darauf…, daß… の形式を採る。例題 8. es ist ähnlich mit… この文では ist ähnlich 即ち連辭＋述語形容詞になつてゐるがそれは es geht … mit と云ふ風に定動詞が動詞になるものも多いことを附け加へて置く。さてこれは非人稱熟語の採る一種の形式であつて、mit の次に三格の名詞が來て、これが意味上の主語となり…**は**…**である**となるのである。

2. es **は屬文の先行詞**となる、例へば**例題** 1. **の es** は daß 文の先行詞であり、主文の主語になつてゐる。daß 文が前文となればこの es は取消さねばならぬ、先行詞としての es は必らず主語になるとは限らない、目的語にもなる。**例題** 2. **の es** は daß 文の先行詞であり、 同時に zu betrachten の目的語となつてをる。例題 3. と 4. とは一寸趣を異にしてゐる。3. **の方は es**…, **als**…**と云ふ形式**で直譯して見るなら、…した時、**それは**……であつたとなる、然らばそれはとは何か、それはとは als 以下の屬文の內容である、して見ると als 以下の屬文が意味上の主語で、es はその先行詞である、als 云々と屬文の形式を取つたのは一種の修辭法に據るものである。**例題** 4. **の方は es** ……, **wenn** ……と云ふ形式で、直譯して見るなら、……するならば、それは…となるのである。これも例題 3. と同樣に修辭法に據るもので、要するに wenn 云々が意味上の主語で、es は先行詞、否後行詞である、但し daß 文と異つて wenn 文は前文になつてもこれを受ける es は取消さない、否取消しては文の形式が不完全になる、何故ならば wenn

文は名詞文でなくて副詞文だ、だから daß 文と異つて形式上主語になれないからである。 **例題** 5. は es が **warum** (疑問副詞) を結合詞として持つ屬文の先行詞の例である。これは別に問題はない。**例題** 6. **の es** は zu を伴ふ不定法 (zu schaffen) の先行詞で同時に**主文の主語**である。この zu を伴ふ不定法は一種の屬文の短縮形である。**例題** 7. の **es** は zu を伴ふ不定法 (zu begehren) の先行詞にして主文の中では erklären の**目的語**となつてをる。**例題** 8. **の es** は zu を伴ふ不定法 (zu glauben) の先行詞にして主文中の主語である。daß 文は glauben の目的語となれる屬文で es とは何等の關係もない。

3. **es は**關係代名詞を結合詞として持つ屬文 即ち**關係文の先行詞**である。しかしこの先行詞は前述の先行詞とは趣を異にしてをる、何故なら、例題を例にとつて說明するなら、關係代名詞 die は前の Ärzte を受けて複數であり、關係文の內容により一格である、即ち文法上からでは die は Ärzte に關係こそあれ es とは無關係である、しかし意味上から云へば es は關係文の先行詞である、この間の消息を知らないと眞實の意味はとれない、注意すべきことだ。

4. 先行詞 es が前置詞と融合して darin, darum, darauf と云ふ形式をとる。**例題** 1. **es** は文法上の主語、Moment が意味上の主語、**darin** は daß 文の先行詞 es と in の融合形、**例題** 2. **の darum** は zu を伴ふ不定法 (zu bewerten, zurückzuverfolgen, zu erklären) の先行詞 es と um の融合形である。

第九章 省略と短縮

I. 省 略

1. **Ist** aber die Wunde gröblichu vernreinigt, **so**

kann man sie und ihre Umgebung abwischen oder abspülen. (wenn 省略) 傷がしかし甚しく汚くされてゐる時には、傷とその周圍を拭ひ或は洗ひ流してよい。

2. Die Haut des Scharlachkranken sieht aus, als **wäre** sie mit roter Farbe bestrichen worden. (als ob の ob 省略) 猖紅熱患者の皮膚は恰も赤色染料で塗布したかの如く見える。

II. 短 縮

1. Herr S., früher stets **gesund**, fühlt sich seit einigen Tagen unwohl. 以前は常に健康だつたS 氏は數日前から不快感がある。

〔注意〕 Herr S., **der** .....gesund **war**, fühlt ..... (關係代名詞及び定動詞の省略)

2. Das Mädchen, vor Schmerzen **weinend**, legte sich nieder. 痛みのため泣いてゐた少女が臥つた。

〔注意〕 Das M., das vor S. weinte, legt ..... (關係代名詞を省き定動詞を分詞に變化せるもの)

3. Der Hausarzt versprach, heute Abend mit seinem Kollegen wieder **zu kommen**. 家庭醫は同業を伴れて今晩又來ると約束した。

〔注意〕 Der H. versprach, daß er ..... kommen wolle. (接續詞と定動詞を省き、動詞を zu 十不定法に變化せるもの、定動詞が話法の助動詞なら短縮の時は通常これを省く)

4. Die Bazillen sind zu klein, **um** sie mit bloßem Auge **zu sehen**. この桿菌は小さくて肉眼では見えない。

〔注意〕 Die B. sind zu klein, als daß man ..... sehen kann. (接續詞、主語、話法助動詞を省き、um ... zu＋不定法に變へたもの)

5. Die Laparotomie **fürchtend**, entfloh der Patient aus dem Krankenzimmer. 開腹術が恐かつたので患者は病室を逃げ出した。

〔注意〕 Weil der P. ... fürchtete, entfloh er... (接續詞、主語を省き定動詞を分詞に變へたもの)

6. **Alkoholisiert**, geht der Kadaver des Fötus nicht ins Fäulnis über. アルコール漬けにすれば胎兒の屍體は腐らない。

〔注意〕 Wenn der K. ...alkoholisiert ist, geht... (接續詞、主語及び定動詞を省き過去分詞をのこす)

【解說】

1. 例題 1. は **wenn** ..... **ist**, **so**..... と云ふ wenn 文の接續詞 wenn を省略し、文尾に常置の定動詞 ist が wenn の後釜に据ゑられたのである。これは wenn 文に最も多い省略形であるが他の接續文にも少しはある、併しこの wenn が省略されて定動詞が文頭に出た形態は丁度疑問文の形式であるから、果して然るか否やを檢するには

後に **so** や **dann** の有無を確める必要がある、これを認めれば wenn 省略文、それがなくて？があれば疑問文だ、但しこの wenn には種々の意味があるから、その略文の場合はよく考慮することだ。例題 2. は **als ob 文の ob を省いて**その後釜に定動詞 wäre が來てゐる、普通の als 文なら定動詞が文尾に必らずある筈だから als の直後に定動詞があれば als ob 文だと思へ、も一つ都合のよいことにはその定動詞が sei とか wäre とか接續法の動詞であることだ。

2. 各例題に簡單ながら〔注意〕がしてあるから、それによつて一斑を知つて載きたい、これを詳細に説明することはこの小册子では到底紙數が足りない。

昭和十二年十二月　五　日　第一版印刷
昭和十二年十二月　十　日　第一版發行

版權所有　不許複製

(大学書林文庫　No. 201)

「醫學獨文の構造」　定價參拾錢

著者　礒部幸一
發行者　佐藤義人
東京市牛込區西五軒町三十二番地
印刷者　西尾眞八
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
印刷所　凸版印刷株式會社
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地

發行所
大学書林
東京市牛込區西五軒町三十二番地
振替東京43740番・電話牛込3344番

(岩淵製本)

大学書林文庫目録

文法 | 渡邊格司著「語源的漫筆」 | NR 1

著者は語源に就ては深い造詣を有し，既に「獨逸語の語源」なる良著を持つてゐる。本書は獨逸語の語源の興味深い一面をとらへ，それに縦横の解説と湧くが如き語源講話の道を繰り擴げて行くのである。蓋し語源は獨逸語習得の上に一つの確固たる標程を築くものであつて，本書は語學愛好の士に御薦めするに足る。

参考書 | 山口修二郎編「政經單語1000」 | NR 2

本書は政治經濟軍語一千語を凡ゆる苦心の末蒐集して，それに適切な定譯を附したものである。猶はそれには勿論性別複數形を附し萬全を期してゐる。この方面に進む者は特殊の專門語の知識なくしてはどうすることも出來ない。本書はその大體を素早く能率的に把握せんと志す人達の爲めに出現したものである。

文法 | 佐久間政一著「獨逸語の話法」 | NR 3

本書は獨逸語の話法を徹底的に解説したものであつて，「可能法の形態」「約束法」「可能法の時稱」「可能法の用途」の四章に亘つて夫々豐富な文例と適切な説明が施されてゐる。蓋し獨逸文法に於て學習者が最も難渋とするものは話法であらう。この話法を突破することなしには獨逸語は理解出來ないし，それを十分把握することによつて獨逸語の諒解に興味は倍加する。本書は學習者の一讀に價しよう。

文法 | 山中壽著「格の用法」 | NR 4

格とは何ぞや。獨逸語を學ぶ者が最初に奇異の感を受ける格は，その外貌にも拘らず，よくその形態から内容に進めば，案外容易に理解出來るものである。本書は呼格，一格，二格，三格，四格，同格に就てその意義とその機能を逐一解明して餘すところがない。本書によつて格の用法を知悉した諸君は必ずや獨逸語の實力の進歩を意識するであらう。

文法 | 渡邊格司著「Averbo からの造語」 | NR 5

Averbo—動詞の變化主要形—とその派生名詞との關係を全部の動詞に就て調査し，又前綴及び前置詞から來た前綴と强變化動詞との結合によつて新しい意味を得，更にそれが名詞に化した狀態を單純なる動詞を中心に觀察せんとしたもの。本書によつて Averbo 語記と共に多數の派生語をも理解し，更に進んで語源的研究への興味を起し得るならば本書の意義は大きいものがある。

讀物 | Hermann Hesse: Wolken
ヘッセ「雲」: 檜澤得二譯註 | NR 101

ヘッセは獨逸文學の大家で，新ロマン主義の巨匠である。その文章は流麗にして情緒に富み，我國でも愛讀せられてゐる。本篇に採り入れた「雲」は彼の出世作「ペーター・カメンチンド」の一節で，雲に向つて深沿的な感慨を述べてゐる。これに手紙文「希人への手紙」を附した。譯註者は水戸高校教授で，篤學の士。

論文 | Friedrich Nietzsche:
Drei Arten von Historie
ニーチエ「歴史の三種類」: 小口優譯註 | NR 102

ニーチエの名は最近ナチスにより頻に喧傳されてゐる。彼は時代的に優れた批評家であると共に永遠の詩人であつて明日尙朽ちざる名聲を持續するであらう。批評家の文章にして彼の如く我國に讀まれたものは他に比類がない。茲に譯註したものは有名なる論文「人生に對する歴史の利害について」の中「歴史の三種類」について論じた一節をとつたもので，極めて興味深いものである。

論文 | Eduard Spranger:
Gruß an die japanische Jugend
シユプランガー「日本青年へ」: 白根孝之譯註 | NR 103

シユプランガーは日獨交換教授として獨逸より公式に派遣されて我國の各大學に於て講演を行つてゐるが，本書は著者が日本に着いた早々に白根氏の邦譯にて「中央公論」誌上に載せられたものである。ナチス獨逸の立場と，その角度よりみた日本青年への警告は非常時日本青年の等しく傾聽すべきものである。

論文 | Thomas Mann: Ein Briefwechsel
トーマス・マン「通告と返信」: 淺井眞男譯註 | NR 104

トーマス・マンはヒツトラーのユダヤ人排撃問題から遂に祖國を逐はれた餘りに著名な作家である。その作品は世界的な名聲を博し，その論文は理知的な毅さを持つてゐる。この一文はボン大學の名譽教授の稱號を剝奪された時の反駁文で，その氣慨は感動なしでは讀めない。この一文は出版後我國にても數ケの誌上に飜譯，批評された。

論文 | Hilty: Kinder der Welt sind klüger
als die Kinder des Lichts.
ヒルテイ「世の子は賢し」: 佐久間政一譯註 | NR 105

本論文はスイスの碩學ヒルテイのもので，彼の一代の名著「幸福論」第一卷に收められたもの。簡潔なる行文，雄勁な筆致，よく彼の學式を代表す。最後に著者自身の註釋を附す。蓋し熟讀に値する好讀物である。

参考書

藤部幸一著「醫學獨文の構造」

NR201

著者は醫學校に於て實地に醫學獨文の講義を續けること多年，この方面に就ては深い知識と尊い體驗を持つ。本書はこのやうな實際的見地からその構造を十數項に分つて存分の解釋と指針を昜示する。本書によつて特殊の醫學獨文の讀解と共にその書き方に就ても相當の見解を獲得することが出來るであらう。醫書生必携の書である。

物語

Die Frau und ihre fünf Anbeter
「五人の求婚者」: 藤田孫太郎譯註

NR301

本書に收められたものはアラビヤンナイトの有名な一節で，レクラム版の完譯本から採られたもの。これだけにてまとまつて興趣と教訓に富み，麗に上下のへだてなしてふ文句を地で行つた，快快なる一篇である。初級の終りから中級へかけての獨習者には絶好の參考書と云へよう。

詩

R. Maria Rilke: Das Buch der Bilder
リルケ「画帖」: 青山郊汀譯註

NR302

リルケは近代獨逸詩壇の鬼才である。時流の外に立ち，繊細なる感覺と感受性に富む精神とは他に類を見ない。茲には初期の作品「画帖」より特に優れたもの十五を選んで譯註した。譯註者は獨逸詩研究の第一人者である。その流麗苦心の譯文と共に原文は輝くであらう。

童話

Brüder Grimm: Das Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen
グリム「怖がり修行」: 内藤好文譯註

NR303

グリムの童話は獨逸童話の集大成だ。民族的な香り高く，素朴で，文章は文法的に整つた名文である。我國の初學者に歡迎される故なきに非ずである。茲に譯註したものは「怖がり修行」の一篇で，彼の數多い童話中でも面白いものである。譯註者は姫路高校教授。

詩

J. W. von Goethe: Gedichte
ゲーテ「詩抄」: 橋本八男譯註

NR304

ゲーテの詩が文學界の驚異的存在なることは今更喋々する迄もあるまい。彼の詩はゲルマン語で書かれた最高の表現である。詩人として彼に比肩し得るものは古今東西全くその人なしと云つてよい。茲にはゲーテの最も優秀な，人口に膾炙された珠玉の如き名篇を選んだ。譯註者は獨逸詩風の研究家で，譯註も至れりつくせりである。

童話

Friedrich Hebbel: Rubin
ヘッベル「紅玉」: 濱中英田譯註

NR305

十九世紀の獨逸文學に於けるヘッベルは稀有の戯曲家として有名である。ヘッベルは又幾つかの特色のある短篇小説を書いてゐる。この童話は背景をアラビヤに取り，物慾よりの淨化を象徴し，しかもなほ愛波線靜の趣を具へた傑作であらう。行文は文法的にも整然として語學學習者にとつてよき參考書である。

小説

Paul Ernst: Die Venus

パウル・エルンスト「ヴエーヌスの像」:
高坂義之譯註

NR401

エルンストは現代ドイツに於て國民的詩人として稱揚されてゐる。彼の示した新古典主義文學の一典型として本書も亦珠玉の如き名篇たるを失はないであらう。畫家と一女性との關係に事よせつゝ藝術と戀愛の交互相關，藝術と生活の不調和を美しく描き出したものである。

小説

R. M. Rilke: Der Liebende

リルケ「戀をする男」佐藤義人譯註

NR402

ドイツ文學の正統的詩人としてゲオルゲと共に並稱さるゝリルケは又美しい短篇作家として獨自の存在を主張する。彼の浪漫的な纖細な神經と現實生活への愛を持つ眼差が結合されて創造されたのがこの小説である。簡明な文と文の間に巧にニユアンス盛る手腕は敬服すべきであらう。

小説

Arthur Schnitzler: Der Sohn

シユニツツレル「息子」: 藤原肇譯註

NR403

シユニツツレルは獨逸小説の大家である。その短篇作家としての價値は世界一流である。彼の描くところのものは悉く情痴の世界で，さうしたものゝ表現の手段に至つては古今獨歩と云つてよい。しかも何等卑猥に墮することなく，人情味豐かな極めて親しみ得る作家である。彼の作品は大抵譯されてゐるがこれは傑作にも拘らず，未だ何人によつても譯出されなかつたものである。

小説

Arthur Schnitzler: Andreas Thameyers letzter Brief

シユニツツレル「タァマイエル氏の遺書」
角信雄譯註

NR404

この小説は妻が黒い肌を持つ子供を生んだ爲めに，世間から様々の迫害と嘲笑を受け，遂に自殺を決するに至る一銀行員の心理過程を手記の形式で描いた興味ある好短篇である。徒らなる自負の爲め，わざとらしい强がりと誇張した反抗のうちに死を遂げる主人公の痛々しい都會人の苦惱は胸に迫るものがある。

小原靜人著　中級獨逸語　定價一、五〇　送料一二
小柳篤二著　文法本位獨文和譯法　定價二、〇〇　送料一二
三浦吉兵衞氏外　高等獨逸語講座（全三卷）各冊　定價一、五〇　送料一〇九

特252
557

¥.30

著者は醫學校に於て實地に醫學獨文の講義を續けること多年、この方面に就ては深い知識と尊い體驗を持つ。本書はこのやうな實際的見地からその構造を十數項に分つて存分の解釋と指針を提示する。本書によつて特殊の醫學獨文の讀解と共にその書き方に就ても相當の見解を獲得することが出來るであらう。

終